

第85回JIAアーバントリップ見学会の報告

実施日 : 2018年02月14日 (水)

テーマ : 「使い続ける住宅を訪ねてvol. 2」

見学趣旨 :

第85回アーバントリップは、「使い続ける住宅を訪ねて vol. 2」と題して見学を企画しました。見学先は、「塔の家（東孝光）、「石津（謙介）邸#38（池辺陽）」、「松川ボックス（宮脇檀）」の3軒の住宅で、いずれの住宅も各時代を代表する住宅かと思えます。各住宅は竣工後 46～60 年の年月を経て現在も使い続けられています。各住宅共に維持して行く為の問題もあるかと思えます。それぞれの時代に建築家たちが考えてきたことを理解し、今も使い続ける住宅を実体験し、今後の使い方も含め、広く議論が高まって行けば良いかと考えております。

見学先:

1、「塔の家」

住所 : 東京都渋谷区
竣工 : 1967 年
設計者 : 東 孝光
案内者 : 東 利恵 (東 環境・建築研究所)

2、「石津謙介邸#38」

住所 : 東京都新宿区
竣工 : 1958 年
設計者 : 池辺 陽
改修設計 : 宮脇檀建築研究室、A・P・O/アルフレックス
お 話 : 石津祥介 (石津謙介長男)・石津壘 (石津祥介長男)

3、「松川ボックス (I期)」

住所 : 東京都新宿区
竣工 : I期 1971年、II期 1978年、III期 1991年
設計者 : 宮脇檀建築研究室
案内者 : 石田信男 (石田信男設計事務所)

第85回コーディネーター 大川 直治 (大川建築都市設計研究所)



塔の家竣工当時



塔の家見学当日



吹内部き抜け



石津謙介邸 竣工当時



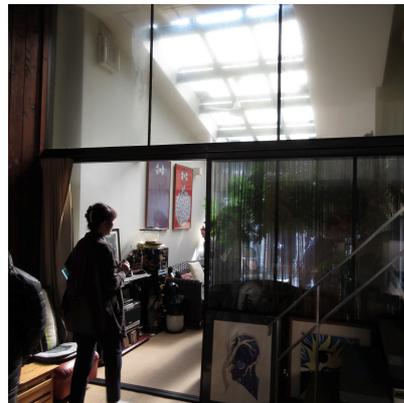
石津謙介邸 見学当日



現在の住まい手・石津祥介氏 居間にて



2階より居間を見る



居間より庭に増築された部屋を見る



庭に増築された部屋より居間側を見る



松川ボックス I 期 竣工当時



居間の吹き抜け～玄関方向



居間の吹き抜け見上げ

第85回アーバントリップ見学記

今回の見学先は、東孝光の塔の家（1967年）、池辺陽の石津邸（1958年）、宮脇壇の松川ボックス1期（1971年）。1970年代に学生生活を過ごした筆者にとっては涎が出るほどの好企画！塔の家と松川ボックスは、掲載された「都市住宅」の紙面まで、まざまざと思いだせるほどである。また、石津邸は、池辺陽設計、「ケーススタディハウス」として建てられたという由緒以外にも、子ども室のオープンなあり方など、目を閉じていても平面図が浮かんでくる。

2月14日、快晴。朝早い集合時間もなんのその。最初は塔の家である。学生には日頃、建築は3次元、空間を知るためには実際に経験してみないとわからない。と話し、可能な限り見学に連れ出し建築体験を心がけている。塔の家、その意味をこれほど如実に物語る住宅も他にない。玄関を入る。正面の壁が目前に迫る。が、壁に囲まれた空間は上へ上へと視線を誘い、存在感を放つ階段は一段一段が主張しながら縦に続く動線となる。うわあ！空間だ！都市住宅だ！とベタな叫びが心の中に広がる。

私たちを迎えてくれたのは東利恵さん。この住まいとともに豊かな時間を過ごしてこられたご本人である。『塔の家』白書』などでしばしばこの住まいについて語られてきた。今は、この住宅をどのように継承していくか新しい試みを準備中とのこと。文化財的な対応も含め、やれることは何でもやったほうが良い。築後51年。国登録有形文化財の資格は十分ある。この住宅がここにある意味は、東京にとって、日本にとって極めて大きいことは言うまでもない。この場にあり続けることが、この住宅の大きな使命である。

次に訪れたのは、石津邸。言うまでもなく、あのVAN創設者石津謙介さんのご自邸である。迎えてくださったのは、現在の居住者で謙介氏の長男石津祥介氏とそのご子息壘氏。お二人とも実にかっこいい。モダンリビング社提案のもと、日本版ケーススタディハウスの第一作目として計画された。連続建ても可能なテラスハウス型の住宅である点、家族の生活の場となる吹き抜けの居間食堂を住宅の中心に明確に置き、その延長上に夫婦の寝室、増設性を考慮した間仕切りのない子ども室の考え方。モダンリビングそのものである。これまで、何度となく平面を見、空間を創造してきた。当初の写真のインパクトに比べると、時を経て、手練れの住人によって住みこなされ、丁寧な増改築を重ねた分だけまろやかで味のある住宅に変身している。増改築の設計は宮脇壇、施工はなんとあのダイフミさんこと田中文男氏。やるべき人たちがやるべきことをして、今日ある住まいである。作り手と住み手。この見事な共同作業の成果が今ここにある。

最後は松川ボックス。設計者の宮脇壇さんの事務所でこの住宅を担当された石田信男氏が迎えてくださった。現在は著名なアートキュレーター清水敏氏が事務所として使用中。松川ボックスは3期にわたって工事が行なわれ、今回見学がかなったのは1期の住宅。RCと木造の混構造である。学生時代、都市型住宅が課題になると皆こぞって宮脇のボックスシリーズを参考にした。固い箱に柔らかい内部。内に向いて開く構成。宮脇が見事に解いて見せた都市住宅のモデルである。中庭を挟み対峙する付属屋との取り合いをみたかったと心底思う。

今回訪問させていただいた3邸とも、立地は都心の一等地である。建設後の東京の変貌を思うとき、今日まで存続できたことは奇跡ともいえる。大事に思う人がいて、大事に守り育ててきたからに違いない。接するものに極めて強い印象を与えるのは、コンセプトの明確さであり、都市の時代に如何に住まうかを明確に形にして提示しているからに他ならない。叶うなら都市の時代といわれた20世紀の遺産として、その成熟していく姿を見守りたいものだ。好企画に心から感謝です。

（関東学院大学教授 水沼淑子）Bulletin 2018年4月号より

第85回アーバントリップ・コーディネーターより一言

今回、運良く名住宅建築3軒が同時に見学出来る機会を得て多くの参加者に堪能していただきました。しかし、竣工後46～60年経った住宅という事で、今後の存続に付いていろいろな問題があり、悩んでいる様子がうかがえました。見学先を検討している時点で「土浦亀城邸」（1935年（S10年）完成。都指定有形文化財（H7年））が売りに出ている情報も得ました。近現代の一般建築の保存再生利用の事例も多くなってきて良い機運はありますが、住宅に関しましては建て主に任せられており、今後次々と姿を消す物が多くなっていくかと、心配です。公的な支援も含め、国民の理解と支援を期待し、建築文化の損失を防いで行ければと思います。